

Title	商業地域におけるカーローディング活動に関する研究
Author(s)	Ibrahim, Mabrouk Ibrahim
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/35154
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

【 4 】

氏名・(本籍)	IBRAHIM MABROUK IBRAHIM		
学位の種類	工 学 博 士		
学位記番号	第 7 0 1 4 号		
学位授与の日付	昭 和 60 年 10 月 29 日		
学位授与の要件	工学研究科 土木工学専攻 学位規則第5条第1項該当		
学位論文題目	商業地域におけるカーローディング活動に関する研究		
論文審査委員	(主査) 教授 毛利 正光		
	教授 岡田 光正	教授 紙野 桂人	教授 小松 定夫
	教授 室田 明	教授 榎木 亨	教授 松井 保

論 文 内 容 の 要 旨

自動車による貨物輸送には荷物の積降しが必要となるが、都市内においてはこのようなローディングが路上においても頻繁に行なわれ、道路交通混雑の一因となっている。しかしながら、カーローディングは都市活動を支える重要な活動であるにもかかわらず、都市交通計画において明確な位置づけが与えられていないのが現状である。本論文は、まず都市内におけるカーローディングの実態を明らかにし、続いてこれらの活動を処理するに当たっての考え方を示し、計画基準についての提案を行なったもので、次の7章から構成されている。

第1章では本論文の目的を述べ、カーローディングに関する既往の研究について整理して、本論文の位置づけを行なっている。

第2章では都心部および郊外地域において、問屋街および小売商店を対象としてカーローディングの実態を調査し、所要時間、時間的変動、施設規模とカーローディング発生量の関係等の種々の特性を明らかにしている。続いて第3章では都心部の業務ビルを対象として同様な調査を行ない、業務ビルにおいてもカーローディング問題が存在することを示し、その特性を明らかにしている。

第4章では上記の調査を受けて、カーローディングスペースの算定方法を示すとともに、対象となる地区や施設の性格に応じて、施設規模別に必要となるスペース基準を求めている。

第5章においてはカーローディング活動だけを考えるのではなく路上における諸活動のなかでこれを捉え、一般の駐車等との関係についても考察している。

第6章においては以上の検討を踏まえて、それぞれの地区あるいは施設において今後カーローディング問題にどのように対処すべきかについて述べ、具体的には、本来カーローディングスペースは建築物

の用途に応じて附置義務的に設けられる必要があること、場合によっては路上のローディングを認めることが合理的であること、並びに今後共同輸送等の物流合理化に努め、施設規模当たりのローディング発生量を減少させるようにすべきであること等について論じている。

第7章は結論で、以上の各章の結果を要約するとともに、本研究の成果を実際上に活用する方法について述べている。

論文の審査結果の要旨

都市業務地区等における街路を利用した荷物の積み降ろしは、交通の流れを阻害し、交通混雑を引き起こす主な原因となっている。したがって、このような行為に対して、適切な対策、規制を実施し、都市活動の円滑を期することは交通計画上緊急かつ重要な課題であって、本研究はこのような問題に対する対策の方法を示したもので、その成果はつぎの通りである。

- (1) 問屋街及び小売店を対象としたカーローディングの実態を調査し、その発生量、所要時間等その特性を明らかにして、問題解決への基礎的事項を明確にしている。
- (2) 都心業務ビルについて、(1)と同様な調査を実施し、前記の地域と同様なカーローディング問題の存在とその特性を明らかにしている。
- (3) 上記の調査結果から、必要なカーローディングスペースの算出方法を示し、施設別規模別に必要とされるスペースの基準を提案している。
- (4) 以上の研究結果を踏まえて、カーローディング問題を含めた今後の大都市の総合的物流合理化に対する著者の考えを述べている。その結果は今後の都市交通計画上有益な示唆を与えるものである。

以上のように本論文は、都市交通対策上重要な問題であるカーローディングについて、その対策と計画基準を明らかにするとともに、今後における物流の合理化について提言していて、その成果は都市計画、交通工学上極めて有用で、学術上、実用上寄与するところが大きい。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。